

5. 南詔国による雲南統一③

5.5 南詔国の「族属」（民族系統）（5.3 の補足）

■南詔タイ族説

パーカー（E. H. Parker）、スコット（J. G. Scott）、クレッドネル（Wilhelm Credner）ら
南詔の「詔」は王の意 → タイ語の chao / 『蛮書』巻8に引かれている数語の「南詔語」

+

「雲南から南下してきた」というタイ国側の伝説、19世紀後半におけるスコタイ王朝の「発見」

↓

- ・タイ族の国である南詔国（の後身の大理国）がクビライのモンゴル軍によって滅ぼされた結果
- ・タイ族が東南アジア大陸部に南下移住して国をたてた（「タイ族の沸騰」）

懐疑論：ペリオ（P. Pelliot）、グルツセ（René Grousset）ら

■中国研究者＝南詔タイ族説に対する反論

凌純声，方国瑜，許雲樵，江応樑ら

- ・南詔国がチベット・ビルマ語系民族の国家であることは一致
- ・彝族の建てた国か白族の建てた国かで議論が分かれる

■「民族系統」とは何を指すか？

- ・南詔王族の民族系統＝南詔国の民族系統でいいのか？

馬長寿《南詔国内的部族組成和奴隷制度》（上海人民出版社，1962）

5.6 南詔国の国都と白族の形成

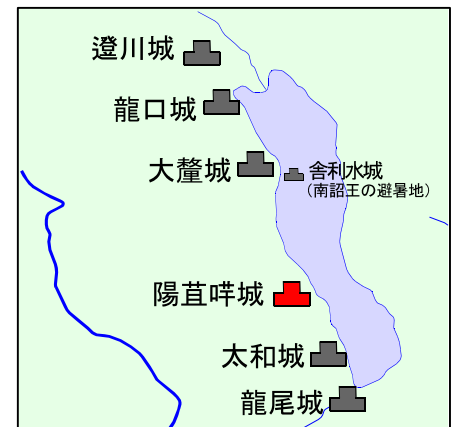
■南詔国の国都

739 太和城建設

764 陽苴咩城^{ようしよび}の建設・遷都（太和城北15里）

- ・陽苴咩城の北40里に大釐城（もと「河蛮」の城邑、皮羅閣の時占拠）
- ・洱海の南端・北端に龍尾城・龍口城
- ・龍口城の北15里に遼川城

→都城に対する二重三重の防備



■首都地区住民の多様性

- ・蒙氏（哀牢人？）を初めとする烏蛮
- ・洱海東南出身の西洱河蛮（白蛮）（重臣層を構成）
- ・河蛮：洱海西岸の先住民
- ・強制移住させられた周辺民族（の上層部）
- ・漢人：①漢代以来の移民の子孫 ②鄭回を代表とする流亡漢人 ③天宝期の唐軍の逃亡兵

■共通の言語・文化の形成

- ・多様な住民の間に共通の言語・文化の必要性

「言語の音は白蛮が最も正しく、蒙舍がこれに次ぐ。それ以外の諸部落はこれに及ばない」

→「最正」とは何か？

凌純聲《唐代雲南的烏蠻與白蠻考》（《人類學集刊》1-1，1938）

方國瑜《南詔是否泰族國家》（昆明《新動向》3-6，1939）

許雲樵《南詔非泰族故國考》（《南洋學報》4-2，1947）

江應樑《南詔不是傣族建立的國家》（《雲南大學學報》，1959-6）

史料 5.17『蠻書』卷八 蠻夷風俗

言語音白蠻最正，蒙舍蠻次之，諸部落不如也。但名物或與漢不同，及四聲訛重。大事多不與面言，必使人往來達其詞意，以此取定，謂之行諾。

大蟲謂之波羅，犀謂之矣，帶謂之佉苴，飯謂之喻，鹽謂之賓，鹿謂之識，牛謂之舍，川謂之賤，谷謂之浪，山謂之和，山頂謂之蔥路，舞謂之伽傍。加，富也。閣，高也。諾，深也。苴，俊也。東爨謂城為弄，謂竹為翦，謂鹽為昫，謂地為深，謂請為數，謂酸為制。言語並與白蠻不同。

史料 5.18『蠻書』卷五 六 第五

大和城、大釐城、陽苴咩城，本皆河蠻所居之地也。開元二十五年蒙歸義逐河蠻，奪據大和城。後數月，又襲破咩羅皮，取大釐城，仍築龍口城為保障。閣羅鳳多由大和、大釐、遼川來往。蒙歸義男等初立大和城，以為不安，遂改遼陽苴咩城。

大和城北去陽苴咩城一十五里。巷陌皆壘石為之，高丈餘，連延數里不斷。城中有大碑，閣羅鳳清平官鄭蠻利之文。論阻絕皇化之由，受制西戎之意。

龍尾城，原本作龍口城。閣羅鳳所築。縈抱玷蒼山南麓數里，城門臨洱水下。河上橋長百餘步。過橋分三路直南蒙舍路，向西永昌路，向東白崖城路。

大釐城南去陽苴咩城四十里，北去龍口城二十五里，邑居人戶尤衆。咩羅皮多在此城。并陽苴咩城并遼川，今並南詔往來所居也。家室共守，五處如一。東南十餘里有舍利水城，在洱河中流島上。四面臨水，夏月最清涼，南詔常於此城避暑。

陽苴咩城，南詔大衙門。上重樓，左右又有階道，高二丈餘，甃以青石為磴。樓前方二三里。南北城門相對，大和往來通衢也。從樓下門行三百步至第二重門，門〔傍〕屋五間。兩行門樓相對，各有榜，並清平官大軍將六曹長宅也。入第二重門，行二百餘步，至第三重門。門列戟，上有重樓。入門是屏牆。又行一百餘步，至大廳，階高丈餘。重屋製如蛛網，架空無柱。兩邊皆有門樓。下臨清池。大廳後小廳，小廳後即南詔宅也。客館在門樓外東南二里。館前有亭，亭臨方池，周迴七里，水深數丈，魚鼈悉有。

遼川城，舊遼川也。南去龍口城十五里。初望欠部落居之，後浪穹詔豐咩襲而奪之。豐時孫鐸羅望與南詔戰敗，退保劍川南，遂有城。城依山足，東距瀘水，北有泥沙。自閣羅鳳及異牟尋皆填固增修，最為名邑。東北有史郎川，又東祿諾品川，又北俄坤。

史料 5.19『蠻書』卷四 名類第四

施蠻，本烏蠻種族也。鐵橋西北大施賤、小施賤、劍尋賤皆其所居之地。男以繒布為縵襠袴。婦人從頂橫分其髮，當額并頂後各為一髻。男女終身并跣足披羊皮。部落主承上，皆吐蕃偽封為王。貞元十年，南詔攻城邑，虜其王尋羅并宗族置於蒙舍城，養給之。

順蠻，本烏蠻種類，初與施蠻部落參居劍、共諸川。咩羅皮、鐸羅望既失遼川、浪穹，退而逼奪劍、共，由是遷居鐵橋已上，其地名劍羌。在劍尋賤西北四百里，男女風俗，與施蠻略同。其部落主吐蕃亦封王。貞元十年，南詔異牟尋虜其王傍彌潛〔并〕宗族，置於雲南白岩，養給之。其施蠻部落百姓，則散隸東北諸川。

■漢語成分の重要性

- ・この時期に漢語が大量に流入したことは確か
- ・現代白語（大理白族の言語）の基本語彙の70%は漢語起源，唐代音もかなり含まれる

■漢語・漢文化の役割

言語以外の文化面でも漢文化を基本とする

- ・白蛮文化＝古くから漢文化の影響を受けた洱海地区の文化（白蛮自体が漢族移民の子孫？）
- ・支配階層の子弟が大量に成都留学
- ・鄭回ら亡命漢人（知識人）の果たした役割

多民族雑居の政治的中心において漢語・漢字が「つなぎ」の役割をはたした

■「白語」の形成

- ・漢語を操るのにたけた「白蛮」が政治・文化などの中心的役割をはたす
→彼らの言語＋漢語をもとに「白語」が生まれる

■白族はいつ頃形成されたか

- ・南詔国後期・大理国期（9世紀後半～13世紀前半）
洱海地区で白蛮・烏蛮の名称が使われなくなる
→次第に民族間の区別が意味をなさなくなり，共通の言語・文化を核として一つの民族に融合

5.7 南詔国の再帰唐

■安史の乱（755～762）後の唐王朝

- ・節度使（元来は辺境防衛のための軍事施設）を内地にも配置
単に大きな兵権を保持するだけでなく，広域の地方民政・財政権を持つ「藩鎮」（はんちん）

■徳宗－李泌の対外政策

- ・徳宗（在位 779～805）：両税法施行後，藩鎮の弾圧をはかるが失敗
- 787 宰相李泌の建言→回紇・雲南・大食・天竺と結び吐蕃を包圍攻撃
- 同年 西川節度使 ^{いこう} 韋皋 が着任
- ・「東蛮」を通じて雲南の状況を探る→上奏「以離吐蕃之党，分其勢。」

■雲南側の事情

779 閣羅鳳死し，異牟尋が継ぐ→吐蕃と共に四川に侵入して唐軍に大敗

- ・吐蕃：「贊普鍾」「日東王」の称号を与えるが，実際は属国あつかい→「雲南これに苦しむ」
- ・亡命漢人の鄭回，清平官となり南詔王異牟尋に唐への帰順をすすめる。

↓

- ・四川南部の少数民族「東蛮」を仲介とした韋皋とのやりとり（787～792）
→吐蕃との関係悪化（唐使の雲南滞在を知られる）

■再帰唐の実現の経過

793～794 異牟尋，正式に唐への帰順を願う書信を送る

794 祠部郎中袁滋が冊南詔使として雲南に赴き異牟尋を南詔王に冊封（→『雲南記』の撰者）
金印（「貞元冊南詔印」）を与える（現存せず）

- ・ただちに対吐蕃共同作戦開始：雲南の吐蕃勢力を金沙江以北に駆逐

史料 5.20『雲南志略』(元·李京 撰) 諸夷風俗 白人

白人，有姓氏。漢武帝開焚道，通西南夷道，今敘州屬縣是也。故中慶、(楚威)〔威楚〕、大理、永昌皆焚人，今轉為白人矣。唐〔(泰)〔太〕和〕中，蒙氏取邛、戎、嵩三州，遂入成都，掠子女工技數萬人南歸，雲南有纂組文繡自此始。白人語：着衣曰衣衣，喫飯曰咽羹茹，樵採曰折薪，帛曰(幕)〔纂〕，酒曰尊，鞍佞曰悼泥，牆曰磚垣。如此之類甚多，則白人之為焚人，明矣。

史料 5.21『資治通鑑』卷二百三十三 貞元 3 年 (787) 9 月

回紇合骨咄祿可汗屢求和親，且請昏，上未之許。會邊將告乏馬，無以給之，李泌言於上曰：「陛下誠用臣策，數年之後，馬賤於今十倍矣！」上曰：「何故？」對曰：「願陛下推至公之心，屈己徇人，為社稷大計，臣乃敢言。」上曰：「卿何自疑若是！」對曰：「臣願陛下北和回紇，南通雲南，西結大食、天竺，如此，則吐蕃自困，馬亦易致矣。」上曰：「三國當如卿言，至於回紇則不可！」泌曰：「臣固知陛下如此，所以不敢早言。為今之計，當以回紇為先，三國差緩耳。」……既而回紇可汗遣使上表稱兒及臣，凡泌所與約五事，一皆聽命。上大喜，謂泌曰：「回紇何畏服卿如此！」對曰：「此乃陛下威靈，臣何力焉！」上曰：「回紇則既和矣，所以招雲南、大食、天竺奈何？」對曰：「回紇和，則吐蕃已不敢輕犯塞矣。次招雲南，則是斷吐蕃之右臂也。雲南自漢以來臣屬中國，楊國忠無故擾之使叛，臣于吐蕃，苦於吐蕃賦役重，未嘗一日不思復為唐臣也。大食在西域為最強，自葱嶺盡西海，地幾半天下，與天竺皆慕中國，代與吐蕃為仇，臣故知其可招也。」

史料 5.22『新唐書』卷二百二十二上 南蠻上

大曆十四年，閻羅鳳卒，以鳳伽異前死，立其孫異牟尋以嗣。……

異牟尋立，悉眾二十萬入寇，與吐蕃并力。……德宗發禁衛及幽州軍以援東川，與山南兵合，大敗異牟尋眾，斬首六千級，禽生捕傷甚眾，顛踣厓峭且十萬。異牟尋懼，更徙苴咩城，築袤十五里，吐蕃封為日東王。

史料 5.23『資治通鑑』卷二百三十二 德宗貞元 3 年 (787)

(正月)……雲南有眾數十萬，吐蕃每入寇，常以雲南為前鋒，賦斂重數，又奪其險要立城堡，歲徵兵助防，雲南苦之。〔鄭〕回因說異牟尋復自歸於唐曰：「中國尚禮義，有惠澤，無賦役。」異牟尋以為然，而無路自致，凡十餘年。及西川節度使韋皋至鎮，招撫境上羣蠻，異牟尋潛遣人因羣蠻求內附。皋奏：「今吐蕃棄好，暴亂鹽、夏，宜因雲南及八國生羌有歸化之心招納之，以離吐蕃之黨，分其勢。」上命皋先作邊將書以諭之，微觀其趣。

(閏五月)己未，韋皋復與東蠻和義王苴那時書，使詞伺導達雲南。

(六月)韋皋以雲南頗知書，壬辰，自以書招諭之，令趣遣使入見。

史料 5.24『資治通鑑』卷二百三十五 貞元 10 年 (794) 6 月

雲南王異牟尋遣其弟湊羅棟獻地圖、土貢及吐蕃所給金印，請復號南詔。癸丑，以祠部郎中袁滋為冊南詔使賜銀窠金印，文曰「貞元冊南詔印」。滋至其國，異牟尋北面跪受冊印，稽首再拜，因與使者宴，出玄宗所賜銀平脫馬頭盤二以示滋。又指老笛工、歌女曰「皇帝所賜龜茲樂，惟二人在耳。」滋曰「南詔當深思祖考，子子孫孫盡忠於唐。」異牟尋拜曰「敢不謹承使者之命。」

史料 5.25『資治通鑑』卷二百三十六 貞元 17 年 (801) 10 月【條下】

韋皋屢破吐蕃，轉戰千里，凡拔城七，軍鎮五，焚堡百五十，斬首萬餘級，捕虜六千，降戶三千，遂圍維州及昆明城。冬十月庚子，加皋檢校司徒兼中書令，賜爵南康郡王。南詔王異牟尋虜獲尤多，上遣中使慰撫之。